特集4

# 地域とともに楽しみながら石見神楽を伝承

飯南神楽団 団長 田部 浩

## 神楽が見られなくなるのを憂いて神楽団結成

飯南町は島根県の中南部にあり、広島県との県境に接した、周囲を標高１０００メートル級の山々に囲まれた高原の町です。その中に「谷」という地区があります。

谷地区は、古くは石見国に属していたことから、谷地区以外では出雲神楽の流れを汲む「奥飯石神職神楽」が伝えられている一方で、ここは石見地方の伝統芸能である「石見神楽」に慣れ親しんだ地域でもあります。

我々飯南神楽団は、その谷地区を拠点として活動する、町内唯一の石見神楽の団体です。

昭和50年代に町内の建設会社で神楽団が結成され、町内で活動するようになったのをきっかけに谷地区の子どもの間で神楽が大流行し、その後、保育所や小学校の子どもたちで「谷子供神楽同好会」が結成され、関西方面などでも公演を行うほど活発に活動をしていました。しかし、過疎化や少子高齢化の影響で、平成10年代には建設会社の神楽団は休止状態となり、谷子供神楽同好会は解散しました。

地元で神楽の団体がなくなり、石見神楽を見る機会が極端に減少したことを憂いた子供神楽同好会ＯＢや関係者が立ち上がり、地元に石見神楽の団体を作ろうと動き始めました。同好会ＯＢだけでなく、町内にいる神楽好きな人にも声をかけ、平成17年に約20名のメンバーで「飯南神楽同好会」を結成しました。

子供神楽のＯＢや他の神楽団で神楽を経験したメンバーは数人しかおらず、大部分は未経験者でした。仕事が終わってからの週２回、夜８時から２時間の練習は体力的にも大変でしたが、神楽ができるという喜びで練習が待ち遠しいと思ったものです。

当初は衣装や奏楽に使う太鼓等も何もなく、太鼓等は公民館所有のものをお借りし、舞に使う小道具は子供神楽の道具を使ったり、簡単なものは新たに自作したりしました。

毎年１～２演目を指導者の方から教わり、演目数も今では19演目までになりました。指導者の方はご高齢であり、指導していただいたのは最初の数年でしたが、教わった舞い方、奏楽、そして精神は今も変わらず引き継いでいると思っています。

神楽の楽校（団員と参加者で記念撮影）

衣装は初めのうちは建設会社からお借りしましたが、最終的には譲渡していただきました。また、町から補助金を紹介してもらったり、公演の出演料などを積み立てして新しい衣装や音響・照明設備、小道具類等を購入し、現在では全て自前で活動しています。

同好会を結成してから10年後の平成27年には、名称を「飯南神楽団」に改称し、10周年記念公演も開催しました。

練習風景

## 地域の伝説を神楽化

この谷地区の程原という集落には、「平家の猛将・平教経の奥方が落ち延びた」という落人伝説があり、神楽団にもその子孫が所属しているという縁から、以前からこの伝説を神楽化できないかと考えていました。台本を作り、町の助成金を活用して衣装や小道具を揃え、平成30年に創作神楽「程原入道」を初披露するための公演を開催しました。この公演には伝説の舞台となった程原集落の皆さんをご招待した他、町内の方々にも多数ご覧いただき、大変な好評

を得ました。

この演目は飯南町を舞台とした物語であることから、飯南町や谷地区の宣伝にも一役買っていると思っています。

創作神楽「程原入道」の一場面

## 後継者を確保するための取り組み

伝統芸能を続けていく上で一番の問題は後継者の育成です。多くの石見神楽の団体は20代から30代が主に舞っていますが、飯南神楽団は40代がまだ現役で舞っています。若い団員がなかなか確保できないのが悩みとなっています。

町内ではもともと石見神楽はマイナーな存在であり、神楽団自体も歴史が浅いため、幼いころから体に染みついているという存在ではありません。そういった状況を打破するため、5年前から、特に未就学児や小学生を対象にした「神楽の楽校」という体験教室を不定期で開催しています。

この教室では神楽の歴史や特徴、見どころなどを講義した後、衣装を着たり道具に触ったり、太鼓を叩くなどの体験をしてもらい、最後に神楽を見てもらうという内容になっています。この体験教室の影響かは分かりませんが、神楽が好きな子どもたちは増えているような気はしています。

近年は地元にある飯南高校の生徒が入団するようになりました。ただ、在学中はいいのですが、高校を卒業し進学するとどうしても一度飯南町を離れなければなりません。そして、そのまま町外で就職してしまえば、もう神楽と関わることはなくなってしまいます。

しかし、令和元年度に高校を卒業した団員3人は、高校卒業後に進学しましたが、うち2人は学校が比較的近かったことからそのまま神楽を続け、もう1人も卒業後町内で就職を決めて神楽団に戻ってきてくれました。現在も町外の学校に進学しながら、練習や公演の度に戻ってきている団員もいます。彼らにとって神楽は人生になくてはならないものになっているのかもしれません。

また、谷子供神楽同好会OBの中にも、飯南神楽同好会が結成されたのを聞きつけ、東京で就職していたにもかかわらず、神楽をしたいからと仕事を辞め、飯南町にUターンした団員もいます。それほどまでに神楽は、人の心を揺さぶる強い力があるのだと思っています。

神楽の楽校（参加者全員で投げ蜘蛛の体験）

## コロナ禍を乗り越えて次世代へ

令和2年は神楽団結成15周年の年で、12月には記念公演を計画し、それに向けた企画も考えていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、予定に入っていた公演は次々と中止となり、15周年記念公演も延期となり、緊急事態宣言発令中は練習すらできない事態になりました。

日常生活の中で伝統芸能というものは、なくてはならない存在かと言われればそうではありません。コロナ禍で全く行われなくなった行事もたくさんあり、中には失われてしまったものもあるかもしれません。

ただ、一般的に見れば不要不急の存在でも、我々からすれば神楽はなくてはならない存在です。これからもコロナ禍のような苦難があるかもしれません。後継者確保など課題もありますが、これからも楽しみながら神楽を舞い、次の世代に伝えて行きたいと思います。

15周年記念公演集合写真

15周年記念公演の様子（演目:天岩戸）